

松本清張全集 10

松本清張全集

10

文藝春秋

松本清張全集10

黒の図説

定価 1400円

1973年 5 月20日第 1 刷 1978年 4 月15日第 4 刷

著 者

© 松 本 清 張

発行者

檜 原 雅 春

発行所

株式会社 文 藝 春 秋

〒102東京都千代田区紀尾井町3

電話(代表)03—265・1211

印刷所

凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えます

黒の図説

3

解説 矢野健太郎

545

装 幀 伊 藤 憲 治

黒の図説

速力の告発	5
分離の時間	57
鷗外の婢	154
書道教授	239
六畳の生涯	327
梅雨と西洋風呂	417

速力の告発

1

「悪夢のような突然の不幸は去年の三月末の日曜日に起こりました」

と、家庭電器販売店主の木谷修吉は書いています。

「そのとき、私は神田の間屋に行つて仕入れの商談をしていました。三時ごろでしたか、店の者から電話がかかってきて、すぐに××町のA病院に行つてくれ、奥さんと坊ちゃんが出たのでケガをして担ぎこまれていると云うのです。たしかにそのときはケガだと云いました。」

妻は、静子しづこといつて三十二歳でした。子供は守一しゅいちといひ、三歳でした。その日は午前中からB町の親戚の家に集まりがあつて出かけていたのです。交通事故と聞いて私はとつさに場所はR街道だと思ひました。道幅がひろいのと、都内からはずれてゐるために速いスピードで走る車の多いこととで知られてゐます。私はバスにトラックか乗用車が衝突し、帰りに乗つていた女房と子が負傷したとばかり思つて

いました。よくあることだからです。

A病院に駆けつけると、女房も子供も死んでいました。救急車が到着したときすでに女房の心臓はとまる寸前だったそうです。髪は血塗れとなり、右脚はつぶれていました。子供は救急車の中で息を引き取つたといひます。固い歩道に仰向けに転倒して後頭部は割れていました。五時間前に家で別れた妻子がこういう姿になつていたので信じられませんでした。

そのときの私の気持ち、放心や激しい慟哭どうきくといった狂気状態はここに書くまでもないと思ひます。それはどのやうに述べても、最愛の妻子を一瞬に奪われた者でないと本当のところはわからない。読む者には通りいっぺんの同情しか起きないでしょう。

私は妻の静子と七年前に恋愛で結婚し、お互いに当初の気持ちがつづいてゐました。妻には次の子が腹にはいつてゐました。守一は赤ん坊のときから私が必ず風呂に入れてやつてゐて、この子も私でなければ決して風呂にはいらなかつたのです。守一もまた私の生命でした。

事故の事情はこうです。R街道のS町七丁目のバス停留所で妻と子がほかの待合わせ客五人と立つてゐるとき、中型乗用車が突然突っ込んできたのです。車は歩道に乗りあげても二メートルほど走り、これになぎ倒されたのが五人でした。若い男たちはとつさに逃げたが、逃げ遅れた年寄りと、子供が犠牲になりました。三人は負傷ですみまし

たが、車の真正面にいた妻と子はほとんど即死でした。そこにガードレールがなかったことも不幸を手伝ったようです。

しかし、そんな設備の有無はこの際あまり問題にはなりません。問題なのはその事故の原因です。車は帝国工業製の『デイクウ・ファースト』（二〇〇〇CC）の最新型でしたが、これが前を走っている大型トラックを追い抜こうとして右横に出て速度を上げたとき、前方に対向車を発見したのです。現場はゆるいカーブを過ぎたところですが、バス停はそこから約百メートル先にありました。あわてたデイクウは越えたセンターラインを左にハンドルを切った。このとき、運転者の頭には後部に迫ってくる巨大なトラックの姿があったようですが、そのためにスピードを落とす暇もなく、それゆえに操縦の余裕を奪われ、ゆるやかなカーブの端にあるバス停の人群れの中に正面から突入してしまったのです。メーターの針は八〇キロを指していました。車もかなり破壊されたのに、運転者はかすり傷さえ負いませんでした。

その運転者には病院の廊下で遇いました。三年前に大学を出た若いサラリーマンでした。彼は警察の人と、病室から出てくる私を廊下の腰かけで待っていたんですが、真蒼な顔をして頭を何度も下げ、詫びを云いました。その声はかすれ、ほとんど言葉になっていませんでした。吉村紀久雄という名で、勤め先は一流会社です。彼はがたがたと震

えていました。事故の事情を話したのは、いっしょにいた所轄署の交通係の警官ですが、車は入社して一年目に月賦で買ったということでした。

私はその場では吉村君には何も云いませんでした。彼が重大な過失に声が出なかったように、私も怒りと悲しみで声が出なかったのです。二十五か六の若者が私の妻子——これまでよき協力者だった妻、これからもその愛の助力を求めなければならぬ妻、将来は榮をさせてやりたいと思っていた妻、それによろしく可愛いさかりになってきた子供と、そして妻の腹にいる子供を入れて三人の生命が、見も知らぬこんな若い男に一挙に奪われたかと思うと、その場に彼を突き倒して叩き殺してやりたくになりました。もし、横に警察の人や病院の人がいなかったら、私はその衝動で何をしたかわかりません。彼が震えていると同じように、私も憤りと無念さで手足が震えておりました。

吉村君は、通夜や葬儀のときはもとより、その後も足しげく私の家に来ては仏壇の前にひれ伏しました。仏壇には、子供が親戚からももらった玩具や菓子子供が供えてありました。バス停で散っていたものです。彼の顔は憔悴し切っていました。くるたびに顔が瘦せて尖り、血色も悪くなっていました。私は吉村君の誠意をだんだん感じるようになっていきました。

彼の両親も謝りにきました。父親は五十三歳の下級公務員です。これも善良な人で、息子の思いがけない過失に狼

狼^おし、困惑するばかりでした。母親は、またその夫のかげにかくれるように暮らしてきたような人で、おろおろしているだけでした。

吉村君はその家の長男で、下に大学二年生の妹と、高校三年生の弟とがいます。彼は父親の話によると、車は入社後最初のボーナスで頭金を払い、あとは月給から払うことにして宿望を果たしたということです。運転免許証は五年前にとっています。

宿望、と彼が云ったように、吉村君は実に車のことには精通していました。基本的なことはもとより、各社製品の長所と欠点の比較、改良点、外車の特徴など詳細な知識を身につけていました。山を研究し尽くした登山家がその山で遭難するように、そこに不幸の陥^お穽^はがあったのかもしれない。彼がその車、帝国工業の『テイコウ』を選んだのは、最高速度に最もすぐれているからだということでした。これは新車を買う人の、とくに若い人の著^いしい傾向ですから、あなたが吉村君を非難することはできません。それに、その車は加速度にもすぐれていると宣伝されています。停止した車がいかに早くとび出して走れるかという宣伝は、スピードにおける競争意識をいっそう露骨にしたものと言えるでしょう。

私は、吉村君がしだいに憎めなくなりました。彼の憔悴^{せうすい}を見たり、その家庭の様子を聞くにつれて、一時おぼえていた憤怒^{おんふん}もゆるみ、か細くなってゆきました。もちろん、

妻も子もいなくなった寝室でひとり横たわっているとき、急に怒りがこみあげ、彼を許す気になっている自分のお人好しに腹が立つてくることもたびたびでした。が、それが間隔を遠ざけていったのは、できてしまったことは仕方がない、先方も故意にやったわけではなく、あれだけ謝っているのだ、いくら怒ってみても死んだ女房子が生き返ってくるわけではなし、と理性とも諦^{あきら}めともつかぬ感情がひろがってきたからではありません。妻子を奪^{うば}われた憎しみの対象を吉村君にだけむけるのが間違っているように思われてきたのです。その焦点にズレを感じはじめたからです。

吉村君は過失傷害致死の容疑で取調べを受けました。運転時に飲酒してなく、過去に交通規則違反もなかったのですが、その点では警察の心証はよかったようですが、なんといっても二人の人間を死なせ、三人を負傷させているのですから簡単ではありません。それに犠牲者が車道にふいにとび出したとか、横断歩道でないところを渡っていたとかいいうのと違い、バス停に立っていたのですから、被害者の側には少しも落度がないわけです。

私はこれを示談にしたのみならず、吉村君の処分ができるだけ軽くなるように裁判所に嘆願書を出しました。結局、彼は禁錮一年、三年間の執行猶予ということになりました。逃亡のおそれがないので、それまでの勾留もありませんでした。被害者である私の嘆願書がきいたかどうかわかりませんが、当局にも吉村君の人情がわかり、心証がよかった

のでしょう、思ったより軽い判決で済みました。

しかし、その判決が確定するまでの吉村君の苦悩は凄惨なほどでした。彼は保険による賠償額のほか自分の金を出したいと私に申し出ました。が、彼の家庭の内情を知る私は、とうてい保険額以外の金を受け取る気持ちになれなかったのです。

吉村君の月給は三万六千円です。半期のボーナスが約十万円です。父親の公務員の給料が四万七千円、半期の賞与がほぼ十万円、父子合わせて年間所得が百四十万円くらいしかない。これから税金その他をさし引かれると実収百十万円そこそこのでしょう。

父親は公務員住宅にはいっています。家賃が安いのは助かるけれど、大学二年生の娘と高校の男の子とがいる。私立大学だから月謝は高い。これに教育費をとられている上に、そう遠くない将来にくる娘の結婚の費用も考えなくてはならぬ、高校生は大学にはいる。長男が独立してほしかったのも束の間で、まだまだ長男には家に金を入れるだけの余裕はありません。

吉村君も楽ではありません。彼には二年後に結婚する予定の若い女性がいまして。そのため彼は一万二千円のアパルト代を払い、車の月賦を払い、洋服その他必要品の月賦を払い、その残りから結婚費用を少しずつ貯めている。自炊とはいっても切りつめたもので、朝食をぬかして、社の安い食堂で昼と兼用にしている。金のかかる付き合いはほ

とんど断わっています。彼が私に、少しでも『慰謝料』の気持ちで出したいと云った金は、その貯めつつあった結婚費用のことなのです。

だが、吉村君は他の負傷者三人にも金を出しているのです。彼の掛けている傷害保険料は死者二人を含む五人ぶんの慰謝料や治療費の総額には達していなかったもので、彼は負傷者の治療費、その一人は入院しているからその入院費と見舞金とを出さねばならないのです。もし、入院が長びき、そして退院しても後遺症のため働けなかったら、彼の負担はさらに重くなってしまう。

吉村君にとって不仕合せなのは、それが会社の用事でなく、日曜日に私用で車に乗っていたことです。会社は彼の補償支払義務に一銭の助力もしません。それどころか、吉村君が昼休みなどのわずかな時間を気兼ねしながら私の家や入院している負傷者のもとに行くのを、会社では快く思っていないのです。

いや、もっと重要なのは彼がこういう事故を起こし、禁錮一年、執行猶予三年ということになったため、会社に暗に忌避されはじめたことです。むろん普通の刑事事件とは違うが、それでも社員の経歴に純白を望む一流会社としてはなんとなく彼の存在がうとましく、迷惑に思われたのでしょう。彼が新人だけによけいに悪いのです。吉村君は大学も入社試験もいい成績でしたが、これでは同期の者に水をあけられるのはむろんのこと、その社での将来の出世は

望めないかも知れません。

今度の事故で、吉村君が婚約者に結婚の遠慮を申し出たところ、相手はあっさりと破約に応じたということです。

吉村君は涙をこぼしていました。

このような例は全国に多いことでしょう。私はたまたま妻子が交通事故の犠牲になったことから加害者の吉村君を知ったわけですが、もつと悲惨な例があると思われまます。車でケガをさせたばかりに相手の長期入院費や家族の生活費まで負担し、それが耐えられなくなって自殺した人のことが新聞に出ていました。その借金のため気が狂ったという人の話も聞きました。まだまだ同じことが違ったかたちであるでしょう。

重大な人身事故を起こした運転者は禁錮などの体刑で刑務所に送られます。男子の場合はそのための特別な刑務所があるが、その受刑者は、破廉恥罪を犯したのとは違ってそれほど『犯罪の意識』はないそうです。しかし、大事な働き手が入所している間にその家庭ではさまざまな形で悲劇が起こっているといえます。商売が悪くなって店を閉じた話、共同経営者に乗っ取られた話、職場を失った話、女房が男と逃げた話、一家離散の話……

自動車による交通事故は、犠牲者の側だけでなく、運転者の側にも大きな運命の狂いを与えています。

私はさきほど私の妻子を殺した憎悪の対象を吉村君だけに当てるのはどうも違っているような気がしてきた、と書

きました。それというのが、ちょうどそのころの新聞広告に『デイクウ』の車の宣伝が全五段で載っているのが目についたからです。

『疾走するという感覚は遅れています 飛翔ひしょうしている感覚です』

これだ、と私は思いました。新発売の車の美しい写真の上には、図案化された旅客機が飛んでいます。

自動車メーカーは車の高速力をここでうたいあげています。さすがに以前のように最高速力の数字を大きくは出していません。業者団体の申し合わせだそうです。その代わり、このキャッチフレーズや図案のように高速力に関するイメージをさらに誇大に煽り立てているのです。

これはドライバー、ことに吉村君のように若いドライバーの車に対する速力希求の心理をつかんだやり方です。だれしも一三〇キロしか出ない車よりも一四〇キロ出せる車のほうが『優秀』にみえる。一四〇キロよりも、一四五キロと五キロでも速い車が『優秀』にみえ、一六〇キロならもつと『優秀』にみえます。車は、そういうドライバーの憧憬する魔性をつくりあげているのです。もともと文明には人間が速力を希求するところから発達した一面があるのだ、そういう本能はだれにもあるわけです。

が、車の最高速力が一六〇キロであろうと一八〇キロであろうと、現在の日本ではまったく意味はありません。東京都内だと制限速度は四〇キロか五〇キロです。名神や東

名の高速道路で許されているのは一〇〇キロまでです。このことは自動車購入者や運転者はもとより承知です。

しかし、車が一六〇キロも出せる能力を持っていることは運転者に優越感をおぼえさせます。そして、それをついて使ってみたくなるものです。ここにドライバーの心理に車の呪術的な誘惑がさきやかけるのです。メーカーや自動車の販売者が、オーバースピードによる災害事故発生は運転者の心がけであって車の罪ではない、などといくら云ってみたところで、げんにそこに高速力があるから、手をふれてみたくなるのです。災害の条件を車の設備にはめこんでおきながら、そしてその誘惑心を唆かしておきながら、やる者が悪いとうそぶく業者の心理はどういうことでしょうか。

私が妻子を殺した憎悪の焦点を吉村君にのみ結像することができずにそれがズレてきたのは、その新聞広告を見ながらのことでした。

自動車メーカーは多大な金をかけて競走用車をつくっています。レースカーは一般に販売してないから会社の収益面においては非生産的なものです。利潤追求に懸命なメーカーがどうして赤字をつくらせてまでレースカーを製造するのか。金をかけて特別な施設をつくり、試走車を走らせるのか。云うまでもなく、レースに勝つとそれが自社製乗用車の優秀を証明するような幻想を世間に与えるからです。つまりはこれも車の販売宣伝です。国際レースのグランブ

リで優勝した某社の車の売行きがとたんに伸びたことが何よりもそれを裏付けています。レースカーをつくり、設備に金を使っても、損をするどころか大儲けになるからです。私は妻子の生命を奪った相手は吉村君ではなく、高速力の車を大量生産している自動車会社こそ加害者ではないかと思うようになりました」

2

家庭電器販売店主末谷修吉はつづけて書いている。

「レースカーのテスト・ドライバーが試走中に事故死した例が過去に二件起こっています。彼らは若い人々の間に英雄視され、偶像視されました。スピードに若い生命を捧げたことが、山で遭難死した山男と似たようなロマンがあつて、カッコよいからでしょう。

だが、カーレースに自社の車を出場させることが販売政策につながっているという視点において、テスト・ドライバーの死に言及したものではありません。

業者は、国際レースでの好成績の結果を自動車の宣伝に使っています。グランプリをとった某社の製品が急激に売れ出したのもそのためです。以前は日本国内レースの優勝も宣伝に利用していましたが、国内のものは『過当競争』になるおそれがあるというので、さすがに各社で自粛を申し合わせ、今ではそれが利用できなくなりました。しかし、広告に出さなくとも、レースに優勝したという事実は、ス

ビードに強いその社の車のイメージアップとなり、販売に貢献するのです。

レースの結果は露骨にうたえなくなったが、それに代わるものが、さきほども書いたように新聞広告にある車と飛行機の組合せです。これではなんら説明の要もなく、『自社製の車は飛行機のように速い』という幻影で売れるわけです。まさか自動車も飛行機と同じ速力を持っていると信じる者はひとりもいませんが、連想的な錯覚は起こせます。『疾走する』という感覚は遅れています。飛翔している感覚です』というキャッチフレーズも同様です。これも誇大広告に変わりはありません。

なぜ車はこのように高速力をうたねばならないのか。それは車の利用者がそれを求めているからです。スピードを希求する人間の本能があるからです。客は王様というように、業者は王様の気に入るようなものをつくらないと儲からないからです。客の虚栄心、優越意識にとり入るといふよりも、それをくすぐる商法です。私の妻子を殺した吉村君もまさにそういう虚栄心や優越意識を、その多寡は問わず、持っていた人です。それは多分に車の呪術にしばられたものです。

交通事故による死亡者の数は年々増加しています。年々、一万数千人が死んでいます。日露戦争の戦死者の数を上回ったのは二年前のことでした。この記録は自動車保有者数のふえる将来にはますます更新されてゆくことでしょう。

その死亡事故の発生を原因別にみると、昭和四十三年の一三、五五六件のうちスピード超過によるものが全国で第三位です。酔払い運転の一〇%が一位、わき見運転の九%が二位、超過スピードによるものがその次の七%です。ところが、都内では死亡事故六九四件（七一六人）のうち、スピード超過によるものが一二九人で一位、安全運転違反が一二七人で二位です。酔払い運転は三位ですが、数はずつと落ちて五六人です。これは都内の酔払い検査のききめでしょう。

メーカーや業者は、四〇キロに押えられた都内でも死亡事故が発生するから、高速力が事故誘発の原因にならないというかもわかりません。が、四〇キロとは道交法に規定された制限で、これを破って六〇キロなり七〇キロなりを出したために事故を起こしたのです。理屈をいえば制限一〇〇キロの高速道路を一三〇キロ出したのと同じことです。車の高速力のことはいまでも問題になっています。私は妻子の交通事故死を経験してから、いまでも発表された記事をさがして読んでみました。

ある評論家は『日本の道路事情からいうと車は六〇〇万台程度が最適密度だが、すでにその二倍以上の普及になっている。東京などは四〇万台が限度なのにすでにその四倍強の一六五万台に達している。日本は平野面積当たりの密度はすでに自動車の国アメリカの三倍もの過密度である。日本の面積の二〇倍もあるアメリカはまだ自動車の過疎国。

アメリカの三倍以上も普及しているのにまだ足らぬと、通る道、格納する場所もないのに夢中で所有競争をする、日本の自動車問題の狂いはここより発する」と云っています。

ある評論家は「人は車のために道を追い立てられ、子供は遊び場所を失っている。主要道路が混雑しているために車は路地に殺到する。道路の安全施設は不十分で、歩行者は車という名の凶器におびやかされているのに対し、運転者は優越意識で歩行者を追い散らす。運転者のモラルは低下するばかり。都市は自動車に敗れた」と云っています。

各評論家などの意見は『せいぜい五〇キロぐらいでしか走れない現状に一六〇キロの高速力を宣伝するとは何ごとか』と云っている。そこである評論家は『速力の二段装置』を提案しています。すなわち五〇キロを一〇〇キロに切りかえる鍵をつくり、これを有料高速道路のゲートにあずけておく。都市内は五〇キロしか出ないようにし、高速道路にはいるときは右のキイをもらい一〇〇キロに変え、出るときは再びキイをゲートにあずけて五〇キロに戻す。こうすれば高速力による事故は防げよう、という主旨のものです。

これに対し業者の回答は『そんな面倒なことをしても意味がない、車の運転者は機械の知識があるから、キイによらなくとも自由に高速力を出せる工夫をするからナンセンスだ』というのです。

これでは、はじめから運転者を法律破りときめてかかっ

た云い方で、泥棒が戸をコジ開けてはいるから戸閉まりは無意味だというのがと同じ論法です。

メーカーが高速力を備える車の必要を主張する具体的な根拠は二つあります。

『追越しのとき、低速力だと危険である。合流点でも同じ。また、追突される危険があるとき高速力だと逃げてこれを避けられる』

追越し自体が違反であること、また危険であるのに、それをここでも前提としています。

追越し違反による死亡事故の件数は、四十三年の統計だと全国で第四位の八五八件です。その高率のほどがわかる。ところが、東京都内だと、同年度ではるかに少なく、十位にもはいっていないのです。

これは全国統計だと地方の場合がはいっているの、車の走る数が比較的少なく追越しが可能だからです。都内だと車の混雑で、追越ししたくもできないからでしょう。

追越しのとき高速力だと安全だというのは逆で、高速力があるから危険な追越しをしなくなるのです。前にノロノロ運転のトラックやバスがあれば、それらが道を譲ってくれるか、二車線の道路に出るまで待てばよい。運転者の追越しの心理は、そこに競争者が現われたとき、おのずからエスカレートされます。その結果、追いつ追われつの無謀な競走が行なわれることになる。

自動車メーカーは、それは車が悪いのではなく、運転者

の心がけが悪いのだと云っています。運転者が気をつければ事故が起こるはずはなく、車が凶器となるはずはないと云っています。

彼らはこう云っています。

『車が人を殺傷する凶器だというのは、台所の包丁が凶器だというのと同じである。包丁を使って殺傷事件が起きたからといって、包丁を世の中からなくすることができようか。テレビが一億総白痴にするからといってテレビを抹殺することができようか。本末転倒もはなはだしい』

ところが、この云い方には重大な論理のすり替えがあります。

台所の包丁が凶器になるのは、犯人がそれを凶器として使用するという意識があつてのことです。つまり、犯意があつての凶器です。しかし、車の運転者は意識して人身事故を起こしたのではないのです。犯意はまったくなく、その意志にそむいて相手を殺傷したのです。ときには、自らも犠牲となり、家族も道伴れにします。すなわち、この場合、車が凶器となるのは偶然です。偶然だが、この『未必の故意』の可能性の率は大きいのです。

はじめから犯意をもって使用する台所の包丁と同じ次元に立って、『包丁は凶器だから作るなどというのと同じ議論です』などと業者が云うのはごまかしの言い訳です。テレビにくらべるのも沙汰の限りです。テレビが人を殺傷するでしょうか。車は人命にかかわっているのです。

ある評論家の説では、このままだとあと五年ぐらいで、車による事故死者数の累計は太平洋戦争の戦死者数に迫るだろうということです。台所の包丁やテレビを例に持ち出すメーカーや販売業者のベテンの屁理屈は恥知らずと云っている。

メーカーや販売業者の宣伝を見ると、『余裕をもって走ることが車の安全性』だと云っています。

『超過スピードで走ることと、すぐれた高速性能をもってゐることは、本質的に異なるはずだ』とある。どこが本質的に異なるはずなのか。『高速で走っているとき、馬力とスピードに余裕を残していることは、いつも手もとに用意している予備金』があるのです。ハイウエーにはいるとき、混雑からの脱出など、あらゆる条件で、余裕ある力が危険からの素早い脱出をさせてくれます』というのが、はずの説明です。

『いつも手もとに用意している予備金』とはうまい文句ですが、スピードと金銭とをこっちゃんにしていたと云っているところは、包丁やテレビを同列に論じているのと同じ詐術的な云い方です。スピードは、決して予備金や貯金ではありません。スピードは目の前で運転者を誘惑しているのです。『ハイウエーへの進入』がそれを表わしています。『混雑からの脱出』とあるが、これこそ違反の追越しを奨励し、危険をすすめているのです。

宣伝文句のあげ足をとるようですが、こうも書かれてい

ます。『この高速力は単にスピード競争や、商品価値のためにはできなかったのではなく、日本はもとより世界的視野に立つたハイウエー時代の安全を考慮して設計されたものです』
『世界的視野に立つハイウエー時代』を現時点で想定して設計し製造した車を、いまの日本の混雑した道路に無茶苦茶に送り出しているのが日本の自動車産業業界です。

こうした美しい文句のもとで、業者は年間一万四、五千人の人間を殺していつているのです。『スピードの余裕は多いほどいいのです』とも云っている。文字通り殺し文句です。

最近の自動車の宣伝は、さきほどもふれたように、高速力のほかに加速力をうたうようになりました。『0—400 M×秒』といったたぐいのです。停止した車がスタートでいかに早くスピードアップするかということです。赤信号が青に変わった瞬間、いや、交差点の青信号が黄になったときからすでに停止線の車は前方にとび出している。そんな寸秒を争って他の車から先に走り出る必要がどこにあるのか。まるで競走車がスタートラインにならんでせり合っているみたいです。

それというのがやはり運転者の優越意識からです。一メートルでも先に出ることが彼らの虚栄的な勝利感を満足させます。いまや走行中の高速力のみならず、スタート時の加速力をメーカーは宣伝するようになった。それというのも、ひとつには、一〇〇〇CC、一五〇〇CC、一八〇〇

CC、二〇〇〇CCの各級の車の最高速力も似たり寄ったりなので、売込み宣伝のポイントを加速力に置きかえたと云えましょう。

しかし、これが歩行者にとって最も危険なことは言うまでもありません。青信号が赤になる前に横合いから『快速』でとび出してきたら、歩行者の安全はどうなるでしょうか。

業者の宣伝にはたしかに車の『安全装置』が大きく出ています。だがこの『安全装置』とは何か。各社ともだいたい同じで、安全枕だとか、ベルトとか、厚いパッドの壁とか、大型尾灯だとか、ワイパーとか、ドアロックとか、見やすいメーターだとか、末梢的な部分の改良ばかりです。それも大切には違いないが、もっと根本の安全性であるボディの堅牢さには少しもふれていません。衝突時に車体が脆弱ぜいじやくだったなら、そんな末梢的な『安全装置』などなんの役にも立たないことはもちろんです。もろに潰つぶれてしまいます。なぜメーカーはボディの鋼板を厚くしないのか。これが何より安全性の増加ではないでしょうか。

それができないのは、車体が重くなるためスピードが落ちるからです。スピードのために根本の安全性を犠牲にしているのです。ためしに、どの社のカタログを見ても自動車の図解に付けられた説明は煩わしいくらいに多いが、ボディの堅牢性を宣伝したものは一つもありません。『近代的』『豪華』『優雅』と最大級にならべられた車内設備も、